

第148回簿記検定試験 3級 出題の意図

[第1問]

(出題の意図)

1. 手形の裏書譲渡の問題です。手形の振出しと手形の裏書譲渡の相違を理解しているかを問いました。
2. 売掛金と買掛金の相殺の問題です。同一相手先に債権債務がある場合、一定の要件を満たしたうえで、相殺して差額だけを授受することがあります。なお、初出題でしたので、問題文に処理方法を指示し、その指示どおりに仕訳を導けるかを問いました。
3. 国債（有価証券）の取得の問題です。割引発行された債券を取得した場合における取得原価の算定方法を理解しているかを問いました。
4. 土地の整地費用の支払いの問題です。有形固定資産の購入時点と付随費用の発生時点が異なる場合でも、付随費用を正しく処理できるかを問いました。
5. 借入金と利息の返済の問題です。利息を日割計算できるかを問いました。

[第2問]

(出題の意図)

資本金と純資産の理解を問う出題です。個人商店（個人事業主）において、事業目的の資産と家計利用目的の資産は、ともに店主個人に所有権があります。そのため、事業用の資産を家計に流用しても店主が自分の資産を自分で使っているにすぎず、法的問題は生じません。ただし、業績を測定するためには、事業目的で使用した分のみを費用とする必要があることから、引出しの処理が必要となります。

なお、会社（法人）であれば会社の資産は会社に所有権があるため、経営者が自分のために流用すると法的な問題が生じます。よって、株式会社では株主への配当の支払いで純資産が減少することはあっても、引出しを行うことはありません。

[第3問]

(出題の意図)

前月末の残高試算表と当月の取引資料から、当月末の残高試算表を作成する問題です。日付順に取引が示されており、概ね基本的といえ、過去にもよく出題されています。したがって、過去問を中心に学習を進めていけば高得点が期待されます。

1日の取引では、貸倒引当金残高を超過する額について適切に処理ができるかを問いました。また、8日の取引では、注文時に手付金を受け取っていた場合の商品販売取引を適切に処理できるかを問いました。いくつかの要素が組み合わさっていますので、問題文をよく読み、一つ一つ問題を解決していくことが必要になります。

[第4問]

(出題の意図)

入金伝票、出金伝票、振替伝票から仕訳日計表を作成する問題です。また、一部振替取引の伝票記入を適切に理解しているかを問う問題も合わせて出題しています。一部現金の入金あるいは出金がある取引については、二つの伝票に分けて記録する必要がありますが、記録された伝票から取引を適切に推定する力をみる問題です。

[第5問]

(出題の意図)

財務諸表作成の問題ですが、今回は決算整理事項等の1.と5.が3級向けの学習であまりみたことのない事項であると思われます。いずれも問題文で処理を説明していますので、落ち着いて解けば正解を導けるはずです。

1. は旅費交通費を先に従業員へ概算払いをするのではなく、従業員へ実費を支払う精算方式です。先に概算払いをする方法では、現金を用意して従業員へ渡した後に残額を返してもらう必要があるため、件数が多くなると現金管理の手間がかかってしまいます。そこで、実務上は従業員が使った分を企業に請求してもらい給料などと一緒に振り込むことで、現金管理の手間を省くことも多く行われています。

5. のように固定資産の耐用年数が経過した後も使用し続けることもよくみられます。簿記検定では減価償却を行ううえでの耐用年数はあらかじめ問題文で示されていますが、実務上は事前の想定もしくは税法基準で一律に決められ

たものを用います。そこで、耐用年数と実際の使用期間で差異が生じるのが通常です。そして、本問のように耐用年数経過後も使用する場合、さらに減価償却を行ってしまうと減価償却累計額が取得原価を超えてしまいます。このような場合は備忘価額として帳簿価額が1円だけ残るように減価償却を行い、耐用年数が経過した後の減価償却は行いません。